

論考

## 五宮から三垣へ―星座分類の變遷の考察

高橋(前原) あやの

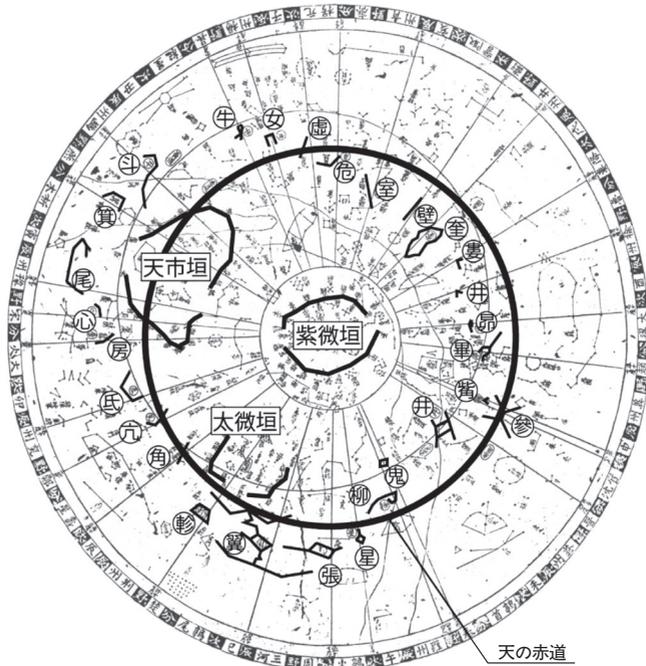
はじめに

中國の星座<sup>〔1〕</sup>には地上にある建物や人、官職、動植物等の名稱が與えられ、天上世界を彩っている。星座數は先秦から漢代にかけて次第に増加し、星座を構成する星數や星座名も變化していく。各文獻においては、それらの星座名をどのような順序で配列し記述するかが試行された。

現存資料のうち、中國における最も古いまとまった星座の記述は『史記』天官書(以下、天官書と表記)であ

る。天官書では、天の北極を中心とする區域を「中宮」とし、その周圍を四方に分けてそれぞれ「東宮」、「南宮」、「西宮」、「北宮」と呼んだ。天を五區に分けるこの五宮分類は『漢書』天文志(以下、『漢志』と表記)に繼承されたものの、以降は複數の異なる分類が現われる。

一つは初唐の太史令である李淳風が用いた、中宮・二十八宿・外官の分類、一つは石氏(石申)・甘氏(甘德)・巫咸の三者それぞれが名附けたとされる星座を三國から晉にかけての人物である陳卓が整理した三家分類、そしてもう一つは三垣(紫微垣・太微垣・天市垣)・二十八宿



圖一 三垣と二十八宿

南宋・淳祐石刻天文圖の拓本畫像(中國社會科學院考古研究所編『中國古代天文文物圖集』文物出版社、一九八〇年掲載)をもとに筆者加工。中央が天の北極。二十八宿はおおむね天の赤道に沿って分布する。

占星術の世界』(東方選書二十二、東方書店、一九九三年)、陳久金『中國星座神話』(出土思想文物與文獻研究叢書二十、臺灣古籍出版有限公司、二〇〇五年)、陳遵媯『中國天文學史』上(上海人民出版社、二〇〇六年)などがあるが、二十八宿や三垣など各分類に屬する星座の紹介が主である。その中で大崎正次氏は、中國の星座を時代ごとに描くという手法をとる。

大崎正次氏は、中國の星座の歴史を九つの時期に區分する(表二)。このうち、先秦については断片的な星座の記述の段階であり、具體的な分類は見られない。また、元以降は星の位置を示す度数の精密化や、西洋天文学流入による變化が見られるものの、傳統的な中國星座の分類の展開は見られないため、本稿では觸れない。本稿では、大崎氏のいう

の分類である。

中國星座の分類に關わる先行研究に、大崎正次『中國の星座の歴史』(雄山閣、一九八七年)や橋本敬造『中國

表一 大崎正次『中國の星座の歴史』の時期区分

(分類名は筆者による)

時代	時期区分	引用文献	分類
先秦	形成期	『詩經』、『易經』、『禮記』月令、『春秋左氏傳』、『國語』、『爾雅』、『呂氏春秋』、『淮南子』、『周禮』、『楚辭』	
秦・前漢前期	發展期	『史記』天官書、『漢書』天文志	五宮
前漢前期～後漢・三國	氾濫期	『開元占經』	三家
六朝・隋	整理期	『晉書』天文志、『隋書』天文志	中宮・二 十八宿・ 外官
唐・宋	確立期	『步天歌』、『宋史』天文志	三垣・二 十八宿
元	安定期	(『元史』曆志)	
明	衰退・改變期	(『明史』天文志)	
清	再編成・増補期	『欽定儀象考成』	
辛亥革命以後	衰減期	—	

五宮から三垣へ―星座分類の變遷の考察

「秦・前漢前期時代の星座」から「唐・宋時代の星座」までの四期の星座分類を對象とする。大崎氏はこの間の星座分類を、五宮↓三家↓中宮・二十八宿・外官↓三垣・二十八宿の順で描く。

しかし三家分類は、星圖上で見れば、石氏・甘氏・巫咸それぞれに分類される星座が点在しており、位置にもとづく分類とはなっていない。他の分類が位置ごとに星座を区分しているのとは對照的である。三家分類と他の分類では背景となる考え方が大きく異なっており、星座の分類には大きく二つの流れがあつたと考えられる。そして、位置にもとづく星座分類は、時代による星座數の増加や價值觀の變化とともに大きく變遷してきたと考えられる<sup>(2)</sup>。筆者はかつて、位置にもとづかない三家分類の形成、展開、日本への影響について論じた<sup>(3)</sup>。本稿では、位置にもとづく分類、すなわち五宮から三垣へと展開する分類について取り上げる。

三垣の「宮」から「垣」への移行に注目した先行研究に、李之亮「三垣考」がある<sup>(4)</sup>。李之亮氏によると、

「垣」という名稱が用いられたのは、紫微と天市については『晉書』天文志(以下、『晉志』)から(それぞれ「紫宮垣」と「天市垣」、太微については『魏書』天象志の「三月辛酉、月は軒轅・太微西垣・帝坐に暈す」(『魏書』二二七二頁)<sup>5)</sup>からである。しかし、その後南北朝から

隋・唐にかけて「宮」と「垣」は併用され、初唐以降にようやく三垣が獨立したと李氏は述べる。三垣の成立について検討した先驅的な研究であるが、李之亮氏が注目するのは星座の名稱に限られる。「宮」から「垣」への展開について検討するためには、星座名だけでなく星座分類の構造についても考える必要がある。

天官書とそれを繼承した『漢志』以降、李淳風が『晉志』、『隋書』天文志(以下、『隋志』)、『乙巳占』を編纂するまでの間の時期は、まとまった天文書が現存せず、星座をどのように分類したかが明らかになっていない。<sup>6)</sup>

また、大崎氏は時期ごとに代表的な文献を用いるのみで、變遷過程を具體的に検討するにはより多くの資料を検討する必要がある。そこで本稿では、星座に關する個別の

記述を整理し各時代の星座認識の實態をとらえた上で、魏晉南北朝から唐代までの資料として星座に關する詩賦を用い、五宮から三垣へと分類が變遷する過程について明らかにしたい。

なお、三垣の呼稱について、星座名としての紫宮と紫微、紫微宮、紫微垣等は、時代により星數やどの星を指すかに相違があるが、おおむね位置は變わらない。太微・太微宮・太微垣や、天市・天市垣も同様である。

「垣」の字があるときは、星座自體を指す場合と區域としての三垣を指す場合とがある。本稿では、各文献それぞれの記述に合わせて星座名を記し、資料に據らず各星座を指すときには紫微・太微・天市と、區域を指すときには紫微垣・太微垣・天市垣と呼ぶこととする。

### 一、五宮分類と漢代の星座世界の認識

まず、五宮分類について確認しておきたい。先述のとおり、五宮分類は天官書や『漢志』で用いられた。他の天文書や正史では五宮分類は明確には用いられないが、

後漢の張衡『靈憲』には「衆星列布し、其の神を以て著わるもの、五列有り。是れ三十五名有り。一は中央に居り、之れを北斗と謂う。動變して占を定め、實に王命を司る。四は方ごとに布し、各おの七ありて二十八宿を爲す」という記述があり、中央の北斗の七星と、四方各々の七星座(二十八宿)を合わせて三十五名と呼んでいる。五宮分類では二十八宿は七宿ずつ四方に配される。『靈憲』のこの説は、中央と四方の五宮分類を意識した考え方といえよう。

五宮について、本来は「宮」ではなく「官」であったとする見解がある。唐の司馬貞『史記索隱』には「案ずるに、天文に五官有り。官は星官なり。星座に尊卑有るは、人の官曹に列位あるが若し。故に天官と曰う」(『史記』一二八九頁)とあり、星座を地上の官職に擬えて「星官」と呼ぶ。實際、宮と官は筆寫の過程でしばしば混同されることから、「五官」とすべしという意見もある<sup>(8)</sup>。しかし司馬貞は唐代の人物であり、漢代に個々の星座を星官と呼んだとしても、星座の分類も全て「官」に

統一すべきであると一概にはいえまい。天官書になく『漢志』で加えられた、星座の總數に關する記述には、「凡そ天文の圖籍に在りて昭昭として知る可き者、經星常宿中外官凡そ百一十八名、積數七百八十三星、皆な州國の官、宮物の類の象有り」(『漢書』一二七三頁)とある。ここでは、官と宮いずれもが星座の構成要素とされている。實際に漢代の文獻の記述を見ていくと、天上の星座世界を語る際には、官よりも宮を軸としていたということができよう。いくつか文獻を確認しておきたい。

「四宮」という語が後漢の王充『論衡』雷虛篇にある。雷が木を碎き家を壊し、時に人を殺すことについて、世間で「樹木を撃折し、室屋を壊敗するは、天の龍を取るなり。其の殺人を犯すや、之れを陰過有り」と謂う<sup>(9)</sup>と考えられていたことの反駁として、王充は次のように、天神が人の隱過(陰惡、闇過)を知ることではできないと述べる。

天神の天に處るは、猶お王者の地に居るがごとし。王者重關の内に居れば、則ち天の神宜しく隱匿の中

に在るべし。王者宮室の内に居れば、則ち天にも亦た太微・紫宮・軒轅・文昌の坐有り。王者と人と相い遠く、人の陰惡を知らず。天神は四宮の内に在るに、何ぞ能く人の闇過を見ん。

ここでは天神と王者を比べ、王における宮室と、天神における四つの星座(四宮)を對應させる。つまり、ここで取り上げられる太微・紫宮・軒轅・文昌の星座は四宮と總稱され、天における宮室ととらえられているのである。星座の組み合わせは異なるが、特定の星座を四宮ととらえる考え方は『淮南子』天文訓の高誘注にもある。天文訓の星座名の記述の中に「四宮」の語があり、高誘は「四宮は、紫宮・軒轅・咸池・天阿」と注を附す<sup>(10)</sup>。『論衡』や『淮南子』高誘注のように四つの星座を四宮とする以外にも、「宮」を用いる概念がある。「遠遊」は戦國時代の屈原の作とする説と漢代の偽作とみる説があるが、その中にも星座名がいくつか見える。成立時期が明確ではないため「遠遊」の記述そのものには立ち入らないが、「文昌を後にして行を掌らしめ、衆神を選置

して以て轂を並べしむ<sup>(11)</sup>」の文昌について、後漢の王逸は、中宮に顧命して、百官に敕するなり。天に三宮有り。紫宮・太微・文昌を謂うなり。故に中宮と言う。

と注を附し、紫宮・太微・文昌の三星座を三宮とする。この中宮は天官書の中宮とは異なる。

また、後漢の班固「西都賦」では長安の宮室について次のように述べる。

其れ宮室や、天地を體象し、陰陽を經緯し、坤靈の正位に據り、泰〔太〕紫の圓方に放<sup>な</sup>う。<sup>(12)</sup>『後漢書』

一三四〇頁)

ここでは宮室の形状について、太(太微)と紫(紫宮)に倣うという。『後漢書』李賢注で「是れ太微は方にして紫宮は圓なり」と説明される通り、星座の形状が太微は方形、紫宮は圓形であることを對比させた記述となっている(圖一参照)。張衡「西京賦」(『文選』卷二)でも、未央宮が天上の紫宮を象つて造設されたと述べる。このように天上世界には、地上の宮室を造る際に則るべき天上の宮室があると考えられていたのである。

これらの例から、漢では星座を用いて天上世界を描寫する際、「宮」を軸として描いていたことがわかる。

各々の星座を指すときに「宮」が用いられるが、「宮」は「宮」の世界の構成要素としてとらえられているといえよう。このように、漢代には天上世界を「宮」を鍵として描寫したことから、天官書や『漢志』の分類も五官ではなく、元來は五宮であつたと考えられる。

次に、のちの三垣にあたる星座の漢代の記述を見ておきたい。張衡『靈憲』には星や星座の記述があり、星座については次のように記されている。<sup>15)</sup>

紫宮は皇極の居爲り。太微は五帝の庭、明堂の房爲り。大角に席有り、天市に坐有り。

そこに見える星座名は少ないが、いずれも帝と關わる。太微が五帝の庭とされるのは、太微に五帝坐という星座があることに因るものであろう。<sup>14)</sup> また『開元占經』が引く諸説の中には、大角は「一に曰く、大角は帝席爲り」、「石氏讞曰く、大角は帝席<sup>15)</sup>」と大角そのものを帝の席とする説が見られる。天市の坐については、天市の中心に

帝坐という星座がある。<sup>16)</sup>

のちの三垣のうち、紫微と太微は「宮」と結びつけられ、天上世界を描く際の代表的な星座と看做される傾向にある。一方、天市は天官書や『漢志』、そして張衡『靈憲』に名稱が見えるものの、「宮」との直接の結びつきは見られない。しかし、『靈憲』の中で天市には帝坐があるとされており、天市がのちの三垣の一つとなる萌しは帝坐の存在にあると考えられる。

このほか漢代の特徴的な點として、緯書に星座の言及があることが挙げられよう。緯書の星座に關する記述は、『開元占經』等の天文書や、正史の天文志の注に引用される。ただし、緯書は他の文獻とともに、天文書や正史の注で星座の項目ごとにばらばらに引用されており、他の文獻と比較して緯書特有の特徴は容易には見いだせない状態である。

## 二、三垣分類と李淳風の分類

三垣分類を用いる代表的な資料として、大崎正次氏は

『宋史』天文志(以下、『宋志』)と「步天歌」を挙げる。ほかに、『靈臺祕苑』は「步天歌」を引用したうえで三垣分類を用い、『觀象玩占』、『乾象通鑑』等も三垣分類を用いている。しかし、『宋志』は元代に編纂されていて他の文獻より時代が下り、「步天歌」や『靈臺祕苑』、『觀象玩占』の成立事情ははっきりしないため、三垣分類がいつ頃から存在したかは明確ではない。

「步天歌」は『靈臺祕苑』のほか、『通志』天文略、『玉海』天文門等に引用される。大きく分けて三垣・二十八宿の順序と二十八宿・三垣の順序の二種があるが、二十八宿・三垣の順序の中でも、三垣が「天市垣・太微垣・紫微垣」のもの(清陶齋藏清抄本『星圖步天歌』)、『紫微垣・太微垣・天市垣』のもの(『靈臺祕苑』の一部の寫本)、「太微垣・紫微垣・天市垣」のもの(『通志』、『玉海』等)と順序はさまざまである。廣く流傳したこともあり文字の異同が著しく、その實態をつかむことは容易ではない。成立時期や作者については、隋の丹元子と唐の王希明の二つの説がある。周曉陸氏は近年の研究

を總括して、隋の丹元子が「步天歌」を作り、唐の開元年間(七一三―七四一年)前後に王希明がそれを改變・再編修したと考えるのが妥當とする。<sup>(17)</sup>この見解が正しいとすれば、隋代には三垣分類が存在したことになるが、王希明が「步天歌」にどれだけ手を加えたかが明確でないため、丹元子が作ったという「步天歌」本來の姿は明らかではない。

『靈臺祕苑』と『觀象玩占』に關しては、拙稿にて觸れたため詳細はそちらにゆずるが、<sup>(18)</sup>『靈臺祕苑』の場合は北宋に重修されるより前の姿、『觀象玩占』の場合は確實な成立時期が定かではない状況にある。成立時期が確かな資料のうち、三垣分類が見える早期のものは、李季『乾象通鑑』や、「步天歌」を載せる鄭樵『通志』、王應麟『玉海』といった、いずれも南宋の文獻である。<sup>(19)</sup>また星圖を確認すると、南宋の淳祐七年(一二四七)に石刻された天文圖は、三垣と二十八宿の名稱が丸で圍われ他と區別されており、三垣・二十八宿が意識されていることがわかる。總合すると、隋か唐には三垣分類を備え

た「歩天歌」ができたと考えられるものの、南宋以前の具體的な状況はわかっていない。<sup>(20)</sup>

五宮から三垣への過渡期にあたる天文書として、李淳風の『晉志』、『隋志』、『乙巳占』がある。三垣分類の成立時期によっては、李淳風の分類は三垣分類とほぼ同時期に成立した可能性もある。李淳風の分類は、本稿冒頭で中宮・二十八宿・外官と述べたが、文献によって實際の表記は異なる。『晉志』は、「經星中宮」、「二十八舍」、「星官の二十八宿の外に在る者」と表記する。<sup>(21)</sup>『隋志』もほぼ同様だが、「經星中宮」を「中宮」と呼ぶ。『乙巳占』は兩者と少し異なり、「列宿」、「中外官」に區分する。列宿は二十八宿のことである。<sup>(22)</sup>

『乙巳占』の中外官は、『隋志』の「中宮」と「星官の二十八宿の外に在る者」を合わせた記述である。李淳風は、二十八宿より外(天の南極側)の星座、すなわち「星官の二十八宿の外に在る者」を外官ととらえていると考えられる。中外官の語は、『漢志』の星座數の言及で用いられる(第一章參照)ほか、張衡『靈憲』でも

「中外の官、常に明るき者百有二十四。名づくべき者三百二十、星爲るもの二千五百」<sup>(23)</sup>と星座數を述べる箇所を用いられる。<sup>(24)</sup>星座世界を描寫する際ではなく個々の星座を數え上げる際に用いられているため、『漢志』や『靈憲』は星官という意味合いの「官」を用いているのであろう。『乙巳占』の「中外官」の場合は星座數についての記述ではないため、『靈憲』や『漢志』とは別に考える必要がある。『晉志』、『隋志』では「宮」を用いているため、「中外官」の「中」は「官」ではなく「宮」であり、『乙巳占』で「中外官」と呼び『晉志』、『隋志』でも「星官」の語を用いることから、「星官の二十八宿の外に在る者」は「宮」ではなく「官」に相當すると考えられる。李淳風の「中外官」は「中宮」と「外官」の總稱と考えて良いであろう。李淳風の分類では、漢代の「宮」を軸とする星座世界は中宮に限定され、二十八宿より外の星座は「宮」の範疇にないと考えられる。あるいは、宮と官を嚴密に區別しなくなったのであろうか。<sup>(25)</sup>

星座としての三垣の位置づけについて見てみれば、天

官書や『漢志』では紫宮は中宮、太微は南宮、天市は東宮にそれぞれ屬するが、李淳風の場合、紫微・太微・天市はいずれも中宮に屬する。天官書と同じ中宮という語を用いてはいるが、李淳風の中宮は天官書よりも廣い範圍を指している。李淳風の中宮は、天官書や『漢志』の中宮の範圍が星座數の増加とともに擴大したものと見え、その後、あるいはほぼ同時期にそれらが三つに分かれて區域としての三垣になったと考えることができよう。

中外官の概念は三家分類にもある。三家各々の星座を中官と外官に區分するのである。三家分類では中外いづれも「官」と表記されており、單純に二十八宿より中(天の北極側)の星座か外(天の南極側)の星座かという考え方となっている。三家に對する下位分類でもあり、三家分類では星座を天上の世界觀の中で描くという考えはなく、純粹に星座の分類と看做していると考えられる。この中官・外官の概念は、『靈憲』や『漢志』の中外官に近い、「中外官」の一つの形といえよう。

五宮から李淳風の分類、三垣への變遷過程では、のち

に三垣となる三星座の星數も變化している。紫微は、天官書や『漢志』には十二星とあるが、『晉志』以降どの文獻でも十五星となっている。また、太微は天官書、『漢志』で十二星だが、『晉志』以降は十星となる。天市も、『晉書』以降は二十二星で構成され、大きな區畫を有するようになるが、天官書や『漢志』では四星に過ぎない。これらの變化は、次第に星座體系が整理されていく過程で生じたものである。

### 三、魏晉南北朝から唐代までの詩賦

魏晉南北朝以降は、正史や他の資料には星座名を羅列する記述は見られず、代わりに星座名を多く擧げる賦が現われるなど、漢代までとは異なる様相を呈する。これまで資料的制約により、魏晉南北朝から唐代までの星座分類の状況は明らかではなかったが、五宮から、李淳風による分類を経て三垣へと變遷する星座分類についてより詳細に検討するため、本章ではこの間の星座を取り上げた詩賦について見ていく。天文書や正史との資料的性

格の相違を踏まえつつ、當時の星座分類の状況を伺う一助としたい。

まず、この時期の星座に関する詩賦として「觀象賦」(北魏・張淵)、「天文大象賦」(初唐・楊炯)、「玄象詩」がある。このうち「觀象賦」の星座配列については、明確な分類の意識は見出せない。現在確認できる五宮、三家、三垣のいずれとも異なる。また「渾天賦」は、賦中に「東宮」、「北宮」、「西宮」、「南宮」の語があり、東宮より前には天の北極附近の星座が記されることから、天官書と同じく五宮の分類にもとづくと考えられる。

三垣分類との関係がうかがえるのは「天文大象賦」と「玄象詩」である。以下、それぞれ詳しく見ていく。

## (一) 「天文大象賦」

「天文大象賦」の作者については諸説あるが、李淳風の父李播とする説が有力であり、李播の作であれば隋末から唐初頃の成立である。ほかに張衡、楊炯等いくつか

かの説があり、早ければ後漢、遅くとも初唐には完成していたと考えられる。現在確認できるテキストにはすべて注がついており、星座ごとに圖を附すものもある。<sup>(26)</sup>

星座数は『史記』より多く、二百九十一星座の名が見える。賦の中に「五宮」の語があり、天官書の五宮分類を踏襲していることがわかる。しかし実際には、まず中宮(あるいは紫微垣)の星座名を挙げ、續いて東宮、天市垣、北宮、西宮、南宮、太微垣の順に星座名が並ぶ。

天市垣の星座は東宮、太微垣の星座は南宮にそれぞれ属するということであろうが、のちの三垣に属する星座がそれぞれに概ねまとまって記述されており、三垣が意識されていた可能性が高い。<sup>(27)</sup> また、二十八宿を分類としては用いていないものの、二十八宿の多くは二星、三星とまとまって記述され、何らかのまとまりが意識されていたと考えられる。斷言はできないが、これは十二次の區分に則って配列されたと考えられる。

十二次ごとに星座を區分した類例として「敦煌星圖」(スタイン三三二六)があり、これは星座を十二次と北極

附近の紫微垣の星座に分けて描く。この十二次の星座の區分を「天文大象賦」の星座名の並びと比較すると、ある程度一致する。「敦煌星圖」が描かれた時期について、ジョゼフ・ニーダム (Joseph Needham) 氏は九四〇年頃、馬世長氏は唐の中宗期(七〇五―七一〇)と比定しており、「天文大象賦」の成立より遅れると考えられる。<sup>28)</sup> 「天文大象賦」の三垣それぞれに對する記述は次の通りである(紫微垣の名はないが、引用した始めの部分が該當する)。

其の文は煥らかに、厥の功は茂さかんならんや。藩衛を環りて以て曲列し、闔闔の洞開を儼かにす。

棘庭の金印を耀かせ、椒宮の玉函を粲らかにす。中に崇垣有り、厥の名は天市。

太微の崢嶸を瞩、端門の赫奕を啓く。何ぞ宮庭の宏敞たるや、乾坤の闔闔に類す。<sup>29)</sup>

紫微については「環」、天市については「垣」の語を用い、いずれも區畫を示すような表現を用いる。太微については「端門」と對になっており、端門は太微垣の南

門を意味する。<sup>30)</sup> 總じて考えると、「天文大象賦」は區分としての三垣を意識し始めた、五宮から三垣への過渡期の作品ととらえるのが妥當であろう。

## (二)「玄象詩」

「玄象詩」は傳世文獻には見えないが、敦煌で二種類見つかっている(ペリオ二五二二、ペリオ三五八九)。二種のテキストはそれぞれ字句の順序が大きく異なっており、意圖的に順序が入れ替えられている。ただし内容は共通しており、ペリオ二五二二に見えるタイトルから、いずれも「玄象詩」と呼ばれる。作者は未詳。成立時期についても明らかではないが、鄧文寬氏はペリオ二五二二に武徳四年(六二二)の年號があることから、初唐にはすでに完成していたと述べる。<sup>31)</sup> この時期の他の詩賦が文學的色彩を強く有しているのに對し、「玄象詩」は星座の星數や位置を詠みこみ、實際に口誦して星座を把握する要素が強い。星座配列の基本となっているのは石氏・甘氏・巫咸の三家分類である。特にペリオ三五八九

では、段落ごとに上部に「赤」「黒」「黄」等の色名が明示される。三家分類にもとづいて星圖を描く場合、二十八宿・石氏の星座は赤、甘氏は黒、巫咸は黄で塗り分けられる<sup>32)</sup>。明示される三家の色は他の資料と共通する。

ペリオ二五・一二とペリオ三五・八九で共通するのは、紫微垣に属する星座が詩全體の末尾に位置するという特徴である。「開元占經」や『三家簿讀』等三家分類を用いる他の文献であれば、三家それぞれに割り当てられるはずの星座の一部が、「玄象詩」では紫微垣として別に分類されているのである。三家の色を明示するペリオ三五・八九では、紫微垣の星座は「紫」と書かれ區別されている。紫微垣の星座を他の星座と區別するという方法は、先述の「敦煌星圖」とも共通する。

また「玄象詩」の中で、紫微垣は「紫微垣」と表記されるが、別に「紫微宮」という名稱も併用されている。

本章では詩賦を取り上げてきた。

北魏・隋・唐の星座名をうたった詩賦には、一部の星

五宮から三垣へ―星座分類の變遷の考察

座のみに言及する漢代の記述とは異なり星座世界全體に及ぶ記述を行なう姿勢が見えるが、一方でそれらの星座名をどう並べるかは詩賦ごとに異なる。五宮や他の分類を参考に配列しつつ、その中で星座名の順序はそれぞれに試行錯誤したようである。五宮分類の形式は「天文大象賦」や「渾天賦」に受け繼がれ、三垣分類の萌しは、「天文大象賦」が冒頭に紫微垣に属する星座を挙げ、「玄象詩」が三家とは別に紫微垣に属する星座を挙げる點に窺える。「天文大象賦」や「玄象詩」の配列からは、三垣、中でも紫微垣が星座單體ではなく星座分類としても機能し始めていることがわかる。詩賦の星座配列は、三垣・二十八宿分類を用いる「步天歌」との関係から考えても興味深い。

#### 四、星座分類の變遷

五宮分類では「宮」を軸として星座を分類したが、次第に三垣が「垣」の役割を果たし、三垣分類では區域としてとらえられるようになる。李之亮氏が指摘するよう

に、星座分類の變遷を考えるにあたっては、この「宮」から「垣」への變化に注目する必要がある。この變化は、三垣分類を用いる資料の成立時期から考えて、漢代以降、早ければ隋、遅くとも宋代までの間に生じたと考えられる。この間の詩賦の記述を見れば、五宮分類にもとづく星座名の配列の中から次第に三垣が形成されたこと、また三垣のうち紫微垣が早期に他と切り離されたことがわかる。

三垣分類の特徴は、紫微垣・太微垣・天市垣の三垣を星座としてだけでなく區分としても用い、同時に二十八宿各々も區分とする點である。二十八宿は五宮分類では四方の宮に屬していた。<sup>33</sup>三家分類では分類のはじめにまとめられている。李淳風は、中宮と外官とは區別して二十八宿の名を擧げる。二十八宿は座標基準として用いられ、星座の中でも比較的早期に成立しているが、<sup>34</sup>二十八宿を周圍の星座を含めた分類として用いるのは三垣分類のみである。五宮から三垣への展開において、三垣・二十八宿が星座單體としてだけでなく、分類の要素を備え

る、すなわち他の星座とは異なる機能を持つようになるという點が、大きな變化といえよう。

もう一點注目したいのは、東西南北の四宮の變遷である。天官書や『漢志』の中宮が李淳風のの中宮、そして三垣へと範圍を擴げつつ展開したことは述べたが、天官書や『漢志』の四宮(東西南北の宮)についても、變遷の軌跡をたどることができよう。天を四方に分割していた四宮は、「天文大象賦」や「敦煌星圖」において十二次をもとに配列しようとする動きに繋がる。<sup>35</sup>李淳風は外官として一まとめにするが、外官の星座名の並びは「天文大象賦」に近く、十二次の順序を意識していたとも考えられる。そして三垣分類では二十八宿によって星座名が配列される。四宮から十二次、二十八宿とより細かな區分が用いられるようになったといえる。

#### おわりに

星座を分類するという行為は、單に星座名を分け並べるだけでなく、星座世界に對する意識が反映されている

といえる。星座分類の變遷や展開も、單に分類が變化するだけでなく、天上世界に對する人々のとらえ方が變化しているといえよう。そこで本稿では、漢代から唐にかけての星座の記述を追うことで、五宮から三垣へと移り變わる星座分類の實態を検討した。

漢代には天上世界を「宮」を軸として描いたが、次第に中宮の範圍が擴大し、「垣」として星座をとらえる見方へ變化した。しかしその變化には明確な境目はなく、「宮」から「垣」へとという星座世界の認識の變化はなだらかなものであったといえる。「宮」から「垣」への過渡期と考えられる魏晉南北朝から唐代までの時期は、まとまった天文書が現存しないために、星座分類に關してもこれまで明らかではない状況にあった。そこで本稿において、星座名を詠った詩賦を手掛かりとして、他の天文書の記述と併せて變遷の過程を検討し、中宮から紫微垣、三垣への移行、あるいは四宮から十二次、二十八宿への移行という星座分類の構造の變遷を明らかにしえたと考える。

#### 五宮から三垣へ―星座分類の變遷の考察

ただし、三垣の形成に人々のいかなる意識が影響しているかについては、まだ十分に明らかにできていない。特に、天市は元々「宮」とは呼ばれておらず、三垣となるに及んで、天市が主要な要素の一つとしてとらえられるようになる。「宮」から「垣」への變遷において、天市垣の存在がいかにして注目されるようになったのかは、今後の検討課題である。

本研究は、JSPS科研費二六八八四〇七三(研究活動スタート支援、一六K二二五〇三(若手研究B)の助成を受けた成果の一部である。

#### 註

(1) 「星座」という語は『史記索隱』で唐の司馬貞が用い、『開元占經』でも唐の瞿曇悉達が用いているものの、唐以前の用例は確認できない。唐以前は二十八宿を星宿、他の星座を星官と呼ぶのが一般的であったと考えられるが、本稿では便宜上これらを總稱して星座とする。

(2) ただし、三家分類と他の分類は共通点が少なくないため、全く相容れない系統という譯ではない。連続性と獨

- 自性の雙方について今後明らかにしていく必要があるであろう。
- (3) 前原あやの「星座の三家分類の形成と日本における受容」(『東アジア文化交渉研究』第八號、二〇一五年)。
- (4) 李之亮「三垣考」(『鄭州大學學報』哲學社會科學版、一九八九年第一期)。
- (5) 以下、本稿で正史を引用する際は、中華書局から出版された二十四史の標點本を用い、頁数のみ示す。
- (6) 『靈臺祕苑』や「步天歌」は存在したものの、後述するように當時の姿をどこまで残しているかは明らかではない。
- (7) 洪頤煊輯『經典集林』卷二十六(百部叢書集成、一九二六年)三葉裏。
- (8) たとえば先述の陳遵媯『中國天文學史』は「五宮」とする。
- (9) 黃暉「論衡校釋」一(新編諸子集成、中華書局、一九〇年)二九四、三〇一頁。
- (10) 劉文典『淮南鴻烈集解』上(新編諸子集成、中華書局、一九八九年)九十四頁。ただし、『淮南子』本文では必ずしも四つの星座の總稱とはされていない。『淮南子』天文訓には、星座名をいくつか列擧する箇所と、列擧した星座それぞれを説明する箇所がある。前者では「紫宮、太微、軒轅、咸池、四守、天阿」の名が見え、後者では「四守」が「四宮」と表記を變え、「所以爲司賞罰」と説明される。高誘注は後者に附けられている。なお、清の錢塘『淮南天文訓補注』では「四方之宿、古謂四宮」、「宮亦爲守」と述べ、四宮は四方の星座の意、宮と守を同義と見なす(同、下八〇二頁)。
- (11) 洪興祖『楚辭補注』(中國古典文學基本叢書、中華書局、一九八三年)一七一頁。
- (12) 「正紫宮於未央 表嶢闕於閭闔。」
- (13) 注(7)所掲『經典集林』二葉裏。張衡の星座に関する記述については、前原あやの「張衡佚文の考察」(『關西大學中國文學會紀要』第三十六號、二〇一五年)でも言及した。
- (14) 五帝坐に關する唐の張守節『史記正義』には、「黃帝坐一星、在太微宮中、含樞紐之神。四星夾黃帝坐。蒼帝東方靈威仰之神、赤帝南方赤熛怒之神、白帝西方白昭矩之神、黑帝北方叶光紀之神。五帝竝設、神靈集謀者也」とある。
- (15) 四庫全書本、卷六十五、二葉裏、四葉表。
- (16) 『開元占經』が引く石氏の説に、「市者四方所樂、帝都之邦。主王之坐、故帝座在市中。聖王之明候也」とある(卷六十五)。石氏の説は、數内清『增補改訂中國の天文曆法』(平凡社、一九九〇年)の推定によれば前漢の記録である。
- (17) 詳しくは、周曉陸『步天歌研究』(中國書店、二〇〇〇

四年)下編第二章を参照のこと。

- (18) 前原あやの「天文占書の解題と「天文占書フルテキストデータベース」の意義」(關西大學東西學術研究所紀要)第四十九輯、二〇一六年)。

- (19) 『乾象通鑑』は、卷八からの星座の去極度数について述べた箇所では三家分類に紫微垣を加えた分類法を用いるが、卷十八から卷九十四の星座の説明・占辭の項目では、星座を三垣・二十八宿・雜座に分類する。後者においても、二十八宿と他の星座(雜座)を區別しており、他の三垣分類とは方法が少し異なる。

- (20) 北宋の楊惟德等撰『景祐乾象新書』は、二十八宿を星座區分として用いており、全體として三垣・二十八宿分類であった可能性が高い。しかし、三垣に關する卷が残缺しており、はっきりとは斷言できない。

- (21) 二十八舎と二十八宿は、使い分けの意圖が明確ではないため、本稿では區別せず論じる。

- (22) 『晉志』、『隋志』は正史という性質上、李淳風個人の撰述というわけではなく、初唐以前の分類を反映している可能性もあるが、明確なことはわからない。本稿では李淳風の星座觀の一部として捉える。

- (23) 注(7)所掲『經典集林』三葉裏。

- (24) なお、『宋書』天文志一には「二十八宿中外宮」、「天文經星、常宿中外宮」という記述があり、「中外宮」の

語がある。『宋書』成立の梁代には、五宮分類を繼承した「中宮」、「外宮」の概念があったと推測できる。

- (25) 李淳風自身が區別しなかったという譯ではないが、『乙巳占』の十萬卷樓叢書所收の刊本では、「中宮」と「中官」、「外宮」と「外官」が混用されている。

- (26) 「天文大象賦」は『續古文苑』卷三に收められるほか、清乾隆鈔本、咸豐六年刊本、民國十五年石印本がある。このうち咸豐六年刊本、民國十五年石印本には各星座の圖が載る。

- (27) 注の中には紫微垣・太微垣・天市垣の語が見え、三垣がはっきりと意識されている。「天文大象賦」の注釋者についても、苗爲、畢懷亮、李淳風、李臺等いくつかの説があるが、苗爲(唐代の人物とされる)とする説が有力である。なお、陳美東『中國科學技術史』天文學卷(科學出版社、二〇〇三年)三四〇頁では、「天文大象賦」が全天の星座を三垣十三區に區分すると明言する。また星座名の並びから、三家分類をも意識していたことを指摘している。

- (28) Joseph Needham, "Science and Civilization in China", volume 3 part 2, Cambridge, Cambridge University Press, 1959 (邦譯:ジョゼフ・ニードム『中國の科學と文明』第五卷, 思索社, 一九七六年)、馬世長「敦煌星圖的年代」(中國社會科學院考古研究所編

- 『中國古代天文文物論集』文物出版社、一九八九年。
- (29) 『續古文苑』卷三、二葉表、七葉裏、十八葉裏。
- (30) 『晉志』には、「太微、天子庭也……南蕃中二星間曰端門。」とある。
- (31) 鄧文寬「比《步天歌》更古老的通俗識星作品―《玄象詩》」(『文物』一九九〇年第三期、のち鄧文寬『敦煌天文曆法考索』(上海古籍出版社、二〇一〇年)所收)。
- (32) 『隋志』には、宋の錢樂之が朱・黑・白に三家を塗り分けたとする記述があるが、以降の文獻では用いられない。
- (33) 二十八宿の後に石氏・甘氏・巫咸の星座名が並んでおり、三家とは別扱いとも考えられるが、星圖では、三家公司に星に色附ける際に石氏と同じ赤で描かれるため、石氏の星座と見なされているとも考えられる。
- (34) 春秋時代末期の曹侯乙墓からは、二十八宿の名が記された漆器が見つかっている。二十八宿の成立時期について、新城新藏、飯島忠夫、橋本増吉、能田忠亮、藪内清らの諸氏が論じているが、例えば藪内清氏は、「前四世紀以前をさかのぼることはあっても、それほど古い年代に歸着し得ないであろう」(注〔16〕所掲、藪内清『増補改訂中國の天文曆法』、四十七頁)と述べる。
- (35) 本稿では言及しなかったが、ペリオ三五八九の「玄象詩」は、十二次を二次ずつ區切って記述しているように

ある。ただし、ペリオ三五八九は詩の前半部分が四割ほど残缺しており、今後より詳細に分析しなければ確かなことはいえない。